無題
—建築の権威と民衆の責任などについて—

建設工学専攻　　me12009　伊藤（いとう） 真一（しんいち）
建築史研究　　指導教員　伊藤 洋子

1．背景

日本国憲法第十二条を記す。

『この憲法が国民に保障する自由及び権利は、国民の不断の努力によつて、これを保持しなければならない。又、国民は、これを濫用してはならないのであつて、常に公共の福祉のためにこれを利用する責任を負ふ。』

政治について我々は、1人1人が理解する責任を負う。これができないのであれば民主主義の恩恵を受ける資格はない。今では私たちはこれをおろそかにしている（無知のあまり、感情に流されることが多い）。このままでは我々の自由と権利は侵されるだろう（このままでは未来は成り立たない。環境問題や戦争等は利権問題に吸収されてしまう）。

2．これからの建築

以下、下の表の説明を行い、これからの建築について述べる。尚、公共建築の語は、国家機関や教会等の大衆を先導する建物用途を除いて、それ（公共建築）と呼ぶこととする。

表：権威的特徴の移り変わり（○は権威的特徴を有すことを、△はその衰退を表す）

	① 古代	② 中世	③ 近世	④ 近代（現代）	⑤ 未来
国家・宗教・会社等の建築物	○	○	△		
国民の公共建築	○		○		○

①古代

神殿や公共の浴場、劇場、図書館等、あらゆる建物が権威主義的な崇高さをもって建てられた。

②中世

多数の教会が建てられた。それは、人々を取りまとめる為に権威主義的に建てられた。また公共建築は教会によってその役割を変えられ、人を取りまとめる権威は教会が牛耳るようになった。

③近世

ルネサンス期に、教会からの一方的精神支配から脱却し、市庁舎などの公共建築が権威主義的な特徴で建てられた。その一方で、バロック期以降はカトリックの反動があり、また、フランスなどでは絶対王権の権威主義建築が建てられた。

④近代（現代）

19世紀以前の様式建築を批判し、市民革命と産業革命に合う建築を目指した。権威主義的な建築はつくられなくなった。

※実際には多くの建築家が20世紀の暴力支配に、権威的な建築で協力した（ファシズム・イタリアやナチス・ドイツ等において）。だがこれは、多数の建築家が殺されていることや、建築家の影響力が政府によって抑圧されることで小さくなっていったことからも分かるとおり、建築家が望んでいたことではない。そうせざるを得なかったのである。近代は消されたのである。その意味で、近代に建てられた権威主義的な建築は、上の表では特例として扱った。（ここでとりわけ強調すべきは、それが特例であったと現代において喝破しきれないところにある）。

また、現代建築は白くて透明なイメージに至った。その為、政治的な主張をすることは極めて少なく、権威主義的な建築からは程遠いものとなった。

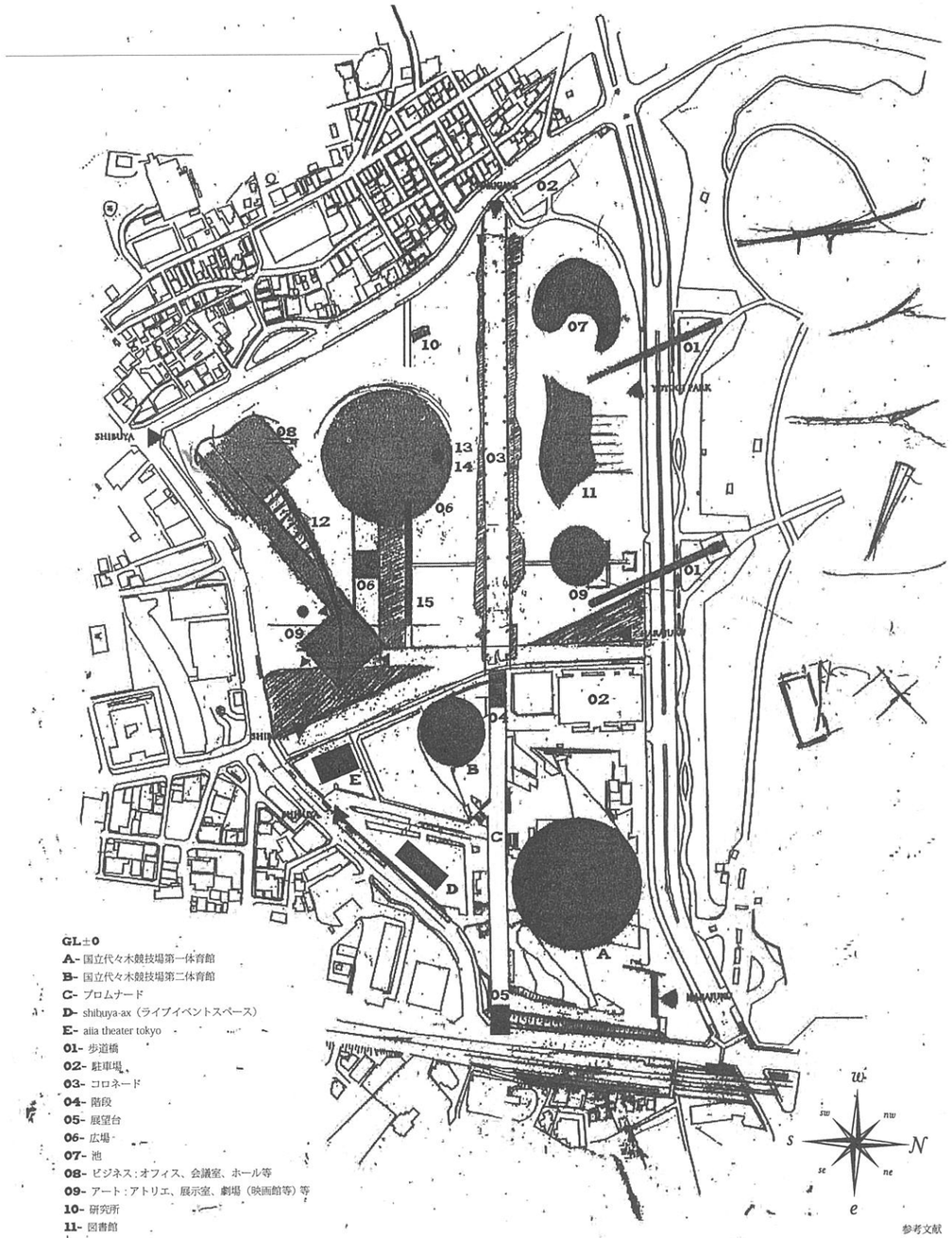
⑤未来

近代（現代）建築は、建築の持つ政治性を隠蔽していたことが反省される。それは民主主義の社会において大きな痛手となる。なぜならば民主主義においては国民が政治において大きく責任を負うからである（民主主義は国民の自由と権利によって成り立ち、それは国民の不断の努力によって保持される）。何も主張しない建築は、多くの国民をその責任から解き放ち、一方においてはその水面下で国家的権力が幅を利かせるという悪循環を生んだ。そこで国民の政治的責任について公共建築においてはその権威を前面に押し出し、国民の日常生活を通してその責任を意識させ、国家機関の建築やオフィス等に関してはオープンな現代建築の特徴を引き継ぐことで、その権威を国民のものよりも弱いことを認識できるようにした。

日本は近代以降を主として上の表の流れに乗ってきた。この流れは、今日のグローバリゼーションにおいては逃れられないものとなっている。以上で表の説明を終えるが、最後に例として表の⑤未来に即して国会議事堂について載せて置く。

—今の国会議事堂は権威主義的であるがために、公共の建物用途（浴場や図書館等）に変えるか、建物を現代建築の様式で建替えるのがよい—。

次頁では設計する建築の敷地等について述べる。次頁の図は配置と建物用途をあらわしている。



参考文献
1)Gilles Deleuze：L' Ile déserte et autres textes (1953-1974),Minuit,2002/pp.11-17「CAUSES ET RAISONS DES ÎLES DÉSERTES」
2)Adolf Loos：Adolf Loos Gesammelte Schriften,Braumüller Lesethek,2010/359-362「Kulturentartung」
3)Robert Venturi：Iconography and Electronics upon a Generic Architecture,The MIT press, 1996/pp.273-274「The Vision Thing: Why It Sucks.」

敷地は、東京都渋谷区神南２丁目の26.75haの敷地である。プログラム（配置と建物用途）は上図の通り。オープンは2020年の東京五輪の時。ミドルメディア（SNS等）を主体に IBC/MPC（国際放送センター/メディアプレスセンター）を立ち上げ、社会のあらゆる問題に関してオープンな報道を行う。広場ではイベント（デモの集会場の拠点）を行い、そこにビジネスやアートを介入させる。それらは国民が運営する。また、ビジネスやアートの人達も、その広場で様々な社会を描くパフォーマンスをする。そしてそれらを研究所員が見て社会を記述する。情報はラジオ塔や広告飛行船を用いて発信される。